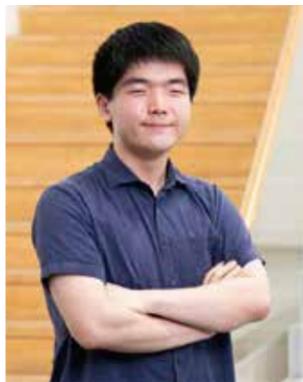


●すでに、こんな先輩たちが「GPA上位者特別プログラム制度」を利用しています

プログラム
適用の
学生

顕微鏡標本解析ツールの開発を通じて得たスキルで AIと病理学の橋渡しができる研究者を目指したい

医学部 医学科4年 宮川諒



中学・高校時代から研究に取り組んできてその楽しさを強く感じ、大学では解析人体病理学教室で研究を続けています。

AI病理研究のグループに所属し、腎臓の糸球体をAIにより自動的に検出し解析するツールの開発を手がけています。糸球体は特定の病気で形態が変化するため、この解析にAIを利用することで、自動的かつ網羅的に無料で行えることを目指しています。日本病理学会総会での発表では優秀賞をいただき、AI-

画像解析の分野が注目されていることを実感しました。

GPA上位者特別プログラムによって、遠方の学会にもいつでも参加できることは大きな恩恵です。将来はAIと病理学の橋渡しができる人材になりたいと考えます。



BigPadを活用して、 グループを越えて成果を共有



学生が主体となって課題を解決していく学習態度やコミュニケーション能力を培うために、少数人数制学習医学統合プログラムに力を入れています。医学統合プログラムを行う教室にはBigPadという大型タッチディスプレイがグループごとに備えられ、パソコンやタブレットと接続したり、議論したアイデアなどをその場でメモすることができます。手書きによる入力には最大で4人まで同時に行うことが可能です。画面に映した内容は最大で100ページまでPDFファイルとして保存したり、プリントすることができるので、議論した内容を他のグループと共有することができます。グループ間で情報共有することにより、学修効果をさらに高めることができます。



プログラム
適用の
学生

夏休みの研究留学を秋まで延長して 帰国後にe-Learningで集中学習しました

医学部 医学科5年 井澤理咲



3年次の夏休みにGPA上位者特別プログラムを利用して留学期間を延長し、9月末までNIH(米国国立衛生研究所)で研究を行いました。

留学中は研究室内外での交流を通じ、文化的な差異を体感しましたが、それは却って自身の自我同一性の立脚と多彩な他者観の獲得に結実しました。留学中の講義は帰国後にe-Learningによって疑問点の解消や復習を効率的に行い、短期間に集中して受講しました。医学の学修に忙殺されることの多い医学部でも、

e-LearningとGPA上位者特別プログラムを活用することで、様々な経験を積むことができます。留学を通じて自我同一性の確立と多様な他者を理解する重要性に気づいた経験は、人生の多くの局面で新たな視点をもたらしてくれると信じています。



高機能シミュレーターと ICTを活用した遠隔PBL

従来は紙に書かれた患者の病歴や来院に至る経緯などをもとに、少数人数グループで問題点を探し、診断を下していたPBL(Problem Based Learning=問題基盤型学習)が、高機能シミュレーターとICTを使う遠隔PBLに進化しました。

メイン教室を初療室に見立て、「シナリオ」と呼ばれる人型シミュレーターを設置し、代表の学生が「シナリオ」から提示される臨床課題に取り組みます。その様子はほかの学生がいるサブ教室のBigPadに同時中継され、画像データや検査データなどの情報も共有。紙ベースと異なり、学生が自ら所見を取りにいかなければ課題が提示されないため、基礎と現場での実践を結びつけて学修しやすく、知識を応用する力が身につきます。



別室で
360°映像と
データを視聴

